

# 近代滑稽小説の系譜（二）

— 国木田独歩「牛肉と馬鈴薯」 —

鷺崎 秀 一

一、

国木田独歩「牛肉と馬鈴薯」は、明治三十四年十一月の『小天地』に発表された作品である。本多浩が「独歩は驚異の哲学をこうした友人たちとの会話の中でみごとに展開させたのである。ゆえにこの作品が独歩の思想小説として代表作に数えられている」とまとめているように、作者である独歩の思想性が窺える作品として重視され、現在でも新潮文庫版作品集の表題となっている。

研究史を辿ってみると、まず昭和期には、内容的に独歩の日記や随筆などの記述と結び付く点の多いことから、そこに明確な独歩文学の主題を見るものや、シンセリテイという用語の定義づけを絡めた論文が集中した。しかし、北野昭彦『国木田独歩』（昭56・1、桜楓社）や滝藤満義『国木田独歩論』（昭61・5、塙書房）などにて一連の研究がまとめられた後、平成以降になると、徐々にこれらの問題とは距離を取った分析が目立つようになった。

とくに、柄谷行人『日本近代文学の起源』（昭55・8、講談社）に触発された再評価がいくつか見られ、まず丸山隆司は、本作に描かれた「北海道熱」に着目し、青春期に「頓挫した独歩の自己治療」として「風景」だけが、さらに抽象されてしまった小説」とし、

北原泰邦は、「人生論を闘わせる中で浮かび上がってくる（世界）の言葉によって囲い込まれてしまう（対象）の悲劇と、そこから逃れようとする主体確立のダイナミズム」に重要性を見ている。同様に柄谷から「示唆を得た」という関肇は、本作の魅力を「牛肉と馬鈴薯に譬える軽妙な比喩をはじめとして、洒落、雑ぜ返し、誇張、奇抜な警句、その他さまざまなレトリックの応酬」にあるとし、中でも「アイロニー」に注目し、その分析から「他者とのコミュニケーション」の場に驚異思想を開いていこうとした小説とした。関は聴衆の声に比重を置いた分析でこれまでの論と一線を画しており、また「演説体」という文体に着目した和田圭樹は、作中で一同の笑い声が生じる場面を詳細に分析し、「笑いによって総括され、なおかつ同時にあらたな課題へと弁証法的に昇華されていく点」に主題がある作品と見ている。その他、『キリスト教文芸』（平13・12）に掲載された二本の論文では、まず、尾西康充が、登場人物の一人である上村の入植失敗体験の描写を踏まえ、「現実（牛肉）と理想（馬鈴薯）との相克を「驚異」によって超越しようとする試みに「詩人的な徹視力」の可能性を見いだすことができる」としたほか、弥頭直哉は「理想や現実を貫いてある「宇宙永劫のなかの生命」即ち、実存的、根源的な人間の生命を信じる作者独歩の折りが漂白された作品」と結

んでいる。

かように、様々な角度から論じられてきた「牛肉と馬鈴薯」であるが、いずれの先行研究においても気にかかるのは、作者独歩の近代性をあまりに自明のことと捉え過ぎている点である。たしかに、思想面や表現面における西洋近代文学の影響は疑いようもなく、また独歩自身も最晩年に於いて、世間の「自然主義作家」というレッテルを避けるように「徳川文学の感化も受けず、紅露二氏の影響も受けず、従来の我文壇とは殆ど全く没関係の着想、取扱、作風を以て余が製作も初めた事（略）其本源は何であるかと自問して、余はワーズワースに想到した<sup>(8)</sup>」などと述べてはいるのだが、一方で「牛肉と馬鈴薯」を発表した頃の独歩は、次のように、思想家や文学者が、宿命的に育った時代と場所の影響下にあるという認識を吐露している。

トルストイでもニーツエでもゾラでも、明治元年か元治元年かに生れて九州相良にでも生育たしめたなら、矢張り甘く行つた処で高山君其人位なものだらうと思ふ。

〔高山文学士の論文に就て〕『民声新報』明34・1・23)

敷衍して考えれば、その著作にも意識的あるいは無意識的に生育した風土が表れてしまうということになるが、そのような認識が明治三十五年四月に発表された「紅葉山人」における「我文化の総てに現はれて居る和と洋の戦が矢張り明治の文学今日までの変遷である<sup>(9)</sup>」という記述に結実しているのではなからうか。

当時の文学は、近代化が進んでいく高揚感に包まれてはいたものの、依然「和と洋の戦」の渦中にあり、ゆえに発表された作品群に

はその痕跡が無数に残っている。具体的に「紅葉山人」で挙げられた「和」の例は「元禄文学」や「徳川文学」であったが、かような「和」の文学的土壌に「洋」が流入しているのが、明治三十年代の文学であることは言うまでもない。実際、独歩は「園遊会」(「園遊会」明35・11)のような、滑稽小説とも近代文学ともつかない作品を残している<sup>(10)</sup>。

先行研究にもあるとおり、「牛肉と馬鈴薯」は、直線的に驚異哲学が語られた作品ではなく、軽妙な比喩や洒落を経由して語られる小説である。かようなレトリックが、いかに生成されたかは明らかでなく、また本作の演説体が、我が国の文学史上、漠然とオリジナリティの高いものと捉えられている節があるが、その点にも問題があるように思われる。これまで「洋」あるいは近代性に依拠した分析の多かった本作であるが、いまだ徳川時代の風土が残っている明治三十年代の作品であることを考慮した上で、分析や評価をする必要があるまいか。

## 二、

「牛肉と馬鈴薯」は「明治倶楽部」という「西洋作<sup>11)</sup>」の建物が舞台である。本作は「或年の冬の夜」、その「明治倶楽部」に導き入れられた岡本誠夫を中心とした話であり、今少し本間久雄が記した概要を借りると次の通りである。

六七人の青年が集つて、おのがじしの人生問題を語り合ふといふので、普通の小説のやうな、人物と事件とが絡み合つて醸

し出す所謂筋<sup>フシ</sup>があるのではなく、もし「筋」があるといへば、彼等が相互に語り、相互に論ずる各自の人生観の交錯と、その発展と解決とがそれであるといつてよく、その点でこの作は、その当時として珍しい一種異様の作風のものであったといへるのである。<sup>(1)</sup>

大づかみに捉えれば、まず前半では、牛肉（現実）か馬鈴薯（理想）のどちらを選ぶかという議論が起こり、参加者たちが各々意見を述べる。多くは、かつては馬鈴薯党であったが、現在では牛肉党に変節したという。ところが、参加者の一人である近藤が「僕は馬鈴薯党でもない、牛肉党でもない」と異なる立場を示すと、彼に同調する形で、岡本が次のように語り始める。ここから後半が幕を開ける。

僕も矢張、牛肉党に非ず、馬鈴薯党にあらずですなア、然し近藤君のやうに牛肉が嗜きとも決つて居ないんです。勿論例の主義といふ手製料理は大嫌ですが、さりとて肉とか薯とかいふ嗜好にも従ふことが出来ません。

それはなぜか。彼は「唯つた一つ、不思議な願を持って居るから其ために何方とも得決めないで居」るのだという。その「不思議な願」こそ「喫驚したい」ということであり、それは「不思議なる宇宙を驚きたい」、「死てふ事実に驚きたい」、「如何にかして此古び果てた習慣の圧力から脱がれて、驚異の念を以てこの宇宙に俯仰介立したい」などと説明される。続けて、かような願いに達着した契機として、突然恋人が亡くなった挿話が語られ、その願いを前にすれば、当今の政治・宗教・文学など無価値であるという大演説に至るのである。かく浮かんできた話を次々と否定し続けながら、最終的な結論

に辿り着く点について、本間久雄は「修辞学上の漸層法といふ巧妙な手法を用ゐてゐる」とし、和田圭樹は「弁証法的に昇華していうとする独歩の試み<sup>(12)</sup>」と見ている。それならば、素朴な疑問として浮かぶのが、なぜ本作の題名は、導入の役割を果たすと早々に否定される「牛肉と馬鈴薯」なのか。独歩の驚異思想に対する執心からすれば、題名が遠まわしで、主題らしきものを言い得てないように思われる。

題名については、当時から正宗白鳥が「富岡先生」とか「牛肉と馬鈴薯」とか「第三者」とか、題目からして極めて無骨<sup>(13)</sup>と述べているように、字面上は単なる食材とも言える。試みに、本作以前で、かように食材を題名としたものを探してみると、注目を集めた作品としては、やや外れて尾崎紅葉「むき玉子」(明24・1・11・2・3)が存在する程度で、たしかに近代文学史上では珍しい題名には違いない。関連性を広げて食ということでも考えても、当時大評判を取った村井弦斎「食道楽」(『報知新聞』明36・1・12)や幸田露伴「珍饌会」(『文芸倶楽部』明37・1)より先んじている。

牛肉と馬鈴薯とはいかなる食材であったか。牛肉が明治という時代を象徴する食材であることは知られているが、本作での位置付けからも分かるとおり、馬鈴薯もまた理想の開拓地北海道に重ねられた、新時代を代表する食材である。念のため、当時の農学書を紐解いてみると、次のような記述が見られた。

泰西諸國に於ては盛んに此植物を栽培し日常欠くべからざる調理品たりと雖本邦に於ては未だ栽培盛んならず僅かに一地方に採殖するに過ぎず(略)用途 馬鈴薯は諸般の調理に用ゐる殊

に西洋料理に於て肉類の添物として必要欠くべからざるものなり其他澱粉「アルコール」を製し或は味噌、餡等を製することを得べし泰西諸國に於ては細民は殆ど之を以て其主要食品となすものあり

（山田幸太郎『蔬菜新書』（明29・9、池田商店））

かように、牛肉と馬鈴薯が、単に現実と理想の喩であるだけでなく、ともに新時代の食文化を代表する食材であつたとすれば、本作の題名「牛肉と馬鈴薯」には、〈新時代の食材―料理して生まれたもの〉という小説的な意匠が見え隠れするように感じられるのだが、じつはこの見立てが一笑に付すべきものともしがたいのは、先行研究での指摘もあるとおり、本作が至る所に洒落を横溢させた作品であるためである。

たとえば、分かりやすい例を挙げると、作中、近藤の類は「四角な腮」と描写されているのだが、それを受けて、本作には次のような場面がある。近藤の車夫が博打で負けて、金を無心してくる場面である。

近藤は直に何ごとを言ひ出さんと身構をした時、給使の一人がつか／＼と近藤の傍に来て其耳に附いて何ごとをか囁いた。すると

『近藤は、この近藤はシカク寛大なる主人ではない、と言つて呉れ！』と怒鳴つた。

『何だ？』と坐中の一人が驚いて聞いた。

『ナニ、車夫の野郎、又た博奕に敗れたから少し貸して呉れろと言ふんだ。……（略）』

ここでは「四角な腮」を持つ近藤が思わず「シカク（そのように）寛大なる主人ではない」と怒鳴っているのである。カタカナ表記なので、意識的な洒落である。他にも、話のやり取りの中では、次に挙げる台詞が目につく。「不思議な願」についての岡本の告白が始まる場面である。

『何だね、その不思議な願と言ふのは？』と近藤は例の圧しつけるやうな言振で問ふた。

『一口には言へない。』

『まさか狼の丸焼で一杯飲みたいといふ洒落でもなからう？』  
『まず其様なことです。……実は僕、或少女に懸想したことがあります』と岡本は真面目で語り出した。

『一口には言えない』と勿体ぶる岡本に対し、近藤は「まさか狼の丸焼で一杯飲みたいという洒落でもなからう？」と答えを先取りしてみせている。対する岡本は「まずそんなことです。……実は僕、或少女に懸想したことがあります」と真面目で語り出すのであるが、この「狼の丸焼」とは「狼の黒焼き」のことであり、井原西鶴『日本永代蔵』巻二「才覚を笠に着る大黒」にある挿話から来たものである。「狼の黒焼き」は、通りかかりに得た犬の死骸を、狼の肉（胃痛神経痛に効くとされていた）として売り大儲けした人の話であり、それを踏まえて解釈すれば、「狼の丸焼で一杯飲みたい」は「騙した金で楽しみたい」ということになる。ここで、それが「洒落」となるのは、人を騙すような話をして、その顔色を楽しもうという算段かという意味合いであろう。牛肉の話題で展開してきたゆえ、ここでも狼肉で洒落たのである。かような「洒落」の世界は次の場面

にも垣間見られる。

『だつてねエ、理想は喰べられませんか』と言つた上村の顔は兎のやうであつた。

『ハ、ハ、ハ、ビフテキじゃあるまいし』と竹内は大口を開けて笑つた。

『否ビフテキです、實際はビフテキです、スチューです。』

『オムレツかねー』と今まで黙つて半分眠りかけて居た、真紅な顔をして居る松木、坐中で一番年の若さうな紳士が真面目で言つた。

『ハッ、ハ、ハ』と一坐が噴飯だした。

ビフテキを起点に、スチュー、オムレツと洋食のメニューが口をついて出る。「西洋作」の「明治俱樂部」だけにとでも言わんばかりである。そして、極めつけは、その「不思議な願」を告白する場面である。

『何だね、早く言ひ玉へ其願といふやつを』と松木はもどかしさうに言つた。

『言ひましよう、喫驚しちやアいけませんぞ。』

『早く早く!』

岡本は静に

『喫驚したいといふのが僕の願なんです。』

『何だ! 馬鹿々々しい!』

『何のこつた!』

『落語か!』

人々は投げだすやうに言つたが、近藤のみは黙言で岡本の説

明を待て居るらしい。

とくに注目されるのが、「喫驚しちやアいけませんぞ」という前置きをした後、「静に」、「喫驚したいといふのが僕の願なんです」と語る、その語り口である。岡本の語りは、まさしくサゲを構える落語家のそれである。先に、「まさか狼の丸焼で一杯飲みたいといふ洒落でもなからう?」という問いかけに「まず其様なことです」と答えていることから分かるとおり、気難しい思索家のように見える岡本は、じつは洒落の分かる男であり、遊びを意識して語ることができる男である。

かように洒落や落語のような滑稽が、作品読解において無視できないものがあるとなると、さらに全体にも目配りする必要があるように思われる。

### 三、

今一度、冒頭部から見みると、岡本が合流した際、この紳士たちは「可い加減に酒が廻わつて」いる状態である。彼らが連れている車夫たちもまた「勝手の方で例の一六勝負」に夢中である。紳士といえど「俗物」と称する彼らの酔態が一種の戯画として見やすいことは、例えば、喜多川歌麿の浮世絵に『酩酊の七変人』(1801) 3年頃 版元・山城屋藤右衛門」という作品があることから明らかである。実際、本作における彼ら一人一人の様子は、戯画的とみて差し支えない。すでに、この紳士たちについては、山田博光の整理が参考となるが、改めて挙げていくと以下のとおりである。

①岡本（作家？）

②竹内（岡本の「旧友」）

③上村（色の白い中肉の品の可い紳士」で、「北海道炭鉱会社の社員」。「顔は兎のやう」）

④綿貫（背の低い、真黒の頬髭を生している紳士）

⑤井山（眼のしよほくした頭髮の薄い、瘦方の紳士）

まず臨席していることが明かされているのはこの五人である。職業以外の情報として体格や外見に関するものが目立つが、綿貫や井山は到底美男として造形されているようには見えず、「品の可い紳士」とされている上村も、酔いが回って「顔は兎のやう」である。一人気分が乗らない岡本を除き、竹内も「大口を開けて笑」っており、折々「ヒヤ／＼」「ヨウヨウ」などの囁き言葉が飛び交う場は賑やかである。さらに、その場には「半分眠りかけていた」という松本も居たことが判明する。

⑥松本（途中で一番年の若さうな紳士）

かような雰囲気のあるのが、本作前半部の見せ場となっている上村の北海道移住に関する失敗談である。上村自身は同志社出身の清教徒で、馬鈴薯党で、かつて「汚れたる内地を去って、北海道自由の天地に投じよう」とした、絵に描いたような文学青年であった。その彼が、絵に描いたような理想の生活を夢見たものの、やはり厳しい現実には敗れて帰京する。この上村の自嘲気味な語りの場面は、当時の読者にとって指をさしたくなるような、また面映ゆいような一幕であったに違いない。

この上村の独壇場に、突如「君は詩人だ！」と叫んで床を靴

で蹴たもの」がいた。これが、本作における岡本の唯一の理解者として登場する近藤である。

⑦近藤（唯だウキスキと首引をして居た背の高い、一癖あるべき顔構をした男）

本作の登場人物は、この①～⑦の七人である。続けて、先の近藤の「詩人だ！」という言葉に呼応するように、その場にいた多くのものがかつて新体詩を作っていたことを打ち明ける。『「権利義務」で一貫して丁つ」で詩人ではなかったという綿貫を含めた告白合戦に一同笑い転げ、そして上村の話は次のように締めくくられる。

『其処ですよ、理想よりか実際の可いほうが可いといふのは。

覚悟はして居たものの矢張り余り感服しませんでしたねエ。第

一、それじゃア痩せますもの』

上村は言つて杯で一寸と口を湿して

『僕は痩せやうとは思つて居なかつた！』

『ハツハツ、ゝゝゝ』と一同笑ひだした。

楽しく酒を交わす彼ら「俗物」が、取るに足らぬ滑稽を交えて戯画化されていることは見やすい。いわば諷刺小説のような仕立てであるが、その点が意識されると、些細な台詞にも辛らつな意味が込められていたように思われる。上村が牛肉党に変節した話を聞き終えた綿貫は、次のように、突然「大に敦<sup>いさよ</sup>圀」く。

『ヒヤ／＼僕も同説だ、忠君愛国だつてなんだつて牛肉と両立しないことはない、それが両立しないといふなら両立さすことが出来ないんだ、其奴が馬鹿なんだ』

すでに、先行研究にて「牛肉と馬鈴薯」の成立にニーチェ主義

擧頭という時代風潮が関与している<sup>(16)</sup>という指摘があるのとおり、この発言は、本作品の数か月前に発表され、当時話題となっていた高山樗牛「美的生活を論ず」(『太陽』明34・8)を意識したものである。そこには次のとおりある。

是の如く詮議し来れば、吾人は茲に一疑惑に逢着せざるを得ざる也。例へば古の忠臣義士の君国に殉せるもの、孝子節婦の親夫に尽せるもの、彼等は其の君国に殉し、親夫に尽すに当りて、果して所謂の至善の観念を有せし乎、有して而して是に準拠したりし乎。換言すれば、君国の為にするは彼等の理想にして、而して死は是れに対するの手段なりと考へし乎。

樗牛の著作についての独歩の発言はいくつかあるが、先に引用した「高山文学士の論文に就て」(『民声新報』明34・1・23)における「甘く行つた処で高山君其人位」というような持つて回つた口ぶりのほか、晩年に至つても「高山君の思想には僕はあまり感服はして居らなかった<sup>(17)</sup>」と述べており、作中の登場人物の口を借りて一言述べずにはいらなかったのではなからうか。他の場面においても岡本が「俗に和して肉欲を充して以て我生足れりとすることも出来ないのです」と述べており、これも「美的生活を論ず」の次の一節に対応しているように取れる。

幸福とは何ぞや、吾人の信ずる所を以て見れば、本能の満足、即ち是れのみ。本能とは何ぞや、人性本来の要求是れ也。人性本来の要求を満足せしむるもの、茲に是を美的生活と云ふ。

こうして見てくると、「牛肉と馬鈴薯」が硬軟多様な滑稽を織り交ぜた作品であることは明白であるのだが、かりに本作を、寄つ

て集まつた七人が洒落や失敗談や挪揄的な意見を交わし合うスタイルの小説と捉え得るのなら、梅亭金鷲の「七偏人」(五編一五巻。1857・63年刊)と同じ構えの作品といふことにならないか。「七偏人」は、竹林の七賢人をもじつて、七人の遊び仲間の滑稽ぶりを描いた作品であり、当時「滑稽名作集下巻」(『帝國文庫』第26編)明27・7で読むことも可能であつた。この『帝國文庫』は博文館が発行した全五十巻に及ぶ文学叢書で、軍書、人情本、黄表紙、洒落本、滑稽本などを幅広く網羅しており、文学関係者の目に留まっていた可能性はある。また、独歩とはほぼ同世代の正岡子規は、明治十九年一月三十日の日付で自らの周囲にいた七人の友人たちを「七変人」と称し、一場の戯れにその「品行性質ヲ互ニ評論シタ<sup>(18)</sup>」ものを残している。恐らく「七偏人」を念頭においての着想であろうし、また「七偏人」については、明治後期に出版された高須梅溪の『滑稽趣味の研究』(明44・1、実業之日本社)の章題に「七偏人」「和合人」及び「八笑人」に現はれたる滑稽趣味<sup>(19)</sup>があり、滑稽本の代表と目されていた節がある。そもそも牛肉を食しながら会話を弾ませるといふ形は、自然と仮名垣魯文の「安愚楽鍋」を想起させ、本作と洒落を主体とした滑稽本との関連性には無視できないものがある。

ただ、独歩の近世文芸の受容状況については明らかになっていないことが多く、ことに滑稽関連に至つては『病牀録』(明41・7、新潮社)に「世人は、文芸を以て、直に草双紙膝栗毛など、同視し何人にも入り易きものと為せり。」と「膝栗毛」の語句が見えるだけで他から辿ることも難しい。もつとも、独歩は、先に挙げた子規や漱石らと年齢がさほど変わらず、『国民之友』の編集者時代には

紅葉や露伴や緑雨らとも交流があった。同程度とまでは言えないにしても、相応の知識は持っていたとは考えられよう。いくつかの作品からも窺い知られる部分がないわけではない。

たとえば、「酒中日記」（『文芸界』明35・11）において、公金を盗み出した疑惑のある母の家に向かった大河今蔵が、結局何も出来ずに帰ってくる場面では、「哀れ気の毒な先生！『見すばらしげな後影』と言ひたくなる。」と述べている。同作では、その前に「自然生の三吉が文句じやないが、今となりては、外に望は何にもない」と呟く場面があり、この「見すばらしげな後影」は、近松門左衛門「丹波与作待夜小室節」上巻の「道中双六」の段、またその改作で「恋女房染分手綱」における「重の井子別れ」の段にある一節であり、何も成し得なかった大河今蔵の姿は、やはり母に追い返された「自然生の三吉」に重ねられているのである。かような手法は、「阿波十郎兵衛」の親子の悲劇を下地とした「源叔父」（『文芸倶楽部』明30・8）にて、すでに見られたものであったが、「牛肉と馬鈴薯」以前では、「郊外」（『太陽』明33・10）でも用いられていた。作中に出てくる「幸吉」は複雑な家庭環境に育っており、現在「継母との間が難しく成」っている。意にそぐわない結婚を迫られたり、つらく当られたりして家の中での居場所がなくなりつつあるという。同作には、彼が訪問した家に梅龍という浪曲師が招かれている場面がある。皆は「耳を澄まして居」たり、笑ったりしているのであるが、実生活でも義理人情に悩まされている幸吉だけは「皆なが笑ふ時でも笑顔一つしなかつた」とされ、聞いていられず中座してしまう。ここでは浪花節の作品世界と幸吉が抱えている背景が重ねられてい

るだけでなく、二切め三切めと進行し、場の雰囲気も強弱する中で、一人苦悩する幸吉の心中が巧みに表現されている。

若き日の独歩の「明治廿四年日記（一月）」には、「金二日（略）夜引頭氏（百太）と共に寄席（岩国亭）に至る」など、足繁く寄席に通っていた節も窺える。独歩は身の回りに当然存在した近世文芸と距離を置いて育ったわけではなく、作品としての効果を高めるためには、意識的に取り込むことも厭わなかったのである。

#### 四、

以上でみてきたとおり、「牛肉と馬鈴薯」には、主に滑稽の手法において、近世文芸の残像が確認された。本作は、滑稽本で用いられた外貌を呈しつつ、理解されにくい近代的な思想が語られるという点で、混沌とした当時の文学作品の在り方を象徴した作品であった。

岡本は、酔った「俗物」を相手に「不思議な願」を語っていた。彼がときにおどけたような語り方をするのは、酒場で「俗物」を相手するにはやむを得ない方法ではなかったか。岡本は、職業的に自身の思想を世に問うている人物とされ、語るに不向きな場において真剣である必要はなかったはずである。端的に言えば、拒絶してよいにもかかわらず、彼は場の調和を保ちながら語った。結果、彼の想いはどこまで伝わったか。本作は、次のような象徴的な場面で結ばれている。

『イヤ僕も喫驚したいと言ふけれど、矢張り単にさう言ふだけ



ですよハ、ハ、」

「唯だ言ふだけかアハ、ハ、ハ、」

「唯だ言ふだけの何か、ヒ、ハ、ハ、」

「さうか！唯だお願い申してみる位なんですなハッ、ハ、ハ、」

「矢張り道楽でさアハッハッ、ハ、ハ、ハ、」と岡本は一所に笑つたが、近藤は岡本の顔に言ふ可からざる苦痛の色を見て取つた。

「アハ、ハ、ハ、」と「ヒ、ハ、ハ、」と浅い笑い声を響かせる「俗物」たちには岡本の自嘲も願ひも理解されない。最後の一文では、近藤が「言ふ可からざる苦痛の色」を見て取つたとされるが、むしろ、小説には読者が存在するのである。彼だけが見て取つたはずもあるまい。

# 注

- (1) 本多浩『国木田独歩―人と作品』(昭41・10、清水書院)
- (2) 丸山隆司「〈風景〉の経歴」(『藤女子大学国文学雑誌』平6・11)
- (3) 北原泰邦「『牛肉と馬鈴薯』の構図―〈主義〉と〈嗜き〉」(『国学院大学大学院紀要(文学研究科)』平8・3)
- (4) 関肇「アイロニーの機制―国木田独歩『牛肉と馬鈴薯』論」(『光華女子大学研究紀要』平10・12)
- (5) 和田圭樹「国木田独歩『牛肉と馬鈴薯』論」(『解釈』平12・2)
- (6) 尾西康充「明治文学における北海道の表象―国木田独歩『牛肉と馬鈴薯』論」(『キリスト教文芸』平13・12)
- (7) 弥頭直哉「国木田独歩『牛肉と馬鈴薯』論」(『キリスト教文芸』平13・12)
- (8) 国木田独歩「不可思議なる大自然(ワーズワースの自然主義と余」

(『早稲田文学』明41・2)

(9) 国木田独歩『現代百人豪、第一編』(明35・4、新声社)

(10) 拙稿「近代滑稽小説の系譜―国木田独歩『園遊会』」(『稿本近代文学』平16・12)を参照されたい。

(11) 本間久雄『続明治文学史』(昭39・9、東京堂出版)

(12) (11)と同じ

(13) (5)と同じ

(14) 剣菱(正宗白鳥)「『独歩集』を読む」(『読売新聞』明38・8・2)

(15) 山田博光「『牛肉と馬鈴薯』研究ノート」(『帝塚山学院大学研究論集』昭51・12)

(16) 新保邦寛「二人の〈私〉・もう一つの〈小民史〉―独歩文学を貫くもの(2)」(『文芸言語研究・文芸篇 第二十四巻』平5・8)

(17) 国木田独歩「病榻雑話」(『新声』明41・3)

(18) 高浜虚子「正岡子規と秋山参謀」(『ホトドクス』明38・7)